



山口大学創基200周年記念式典で挨拶する岡正朗学長（詳細は3頁）



第35号
発行・鴻文会

山口大学人文学部・大学院
人文科学研究科・旧文理學
部文学科 同窓会

(事務所)

〒753-0831 山口市平井773-2

沖田ビル202

電話・FAX 083-928-4527

郵便振替口座 01500-4-15902

http://

homepage3.nifty.com/koubun/

メール:kobun1981@ybb.ne.jp

人文学部及び人文科学研究科の改組について



人文学部長・
人文科学研究科長
根ヶ山 徹

昨年度、文部科学省高等教育局法人支援課及び初等中等教育局教職員課における数次にわたる事前相談を経て、去る五月一日、人文学部・人文科学研究科設置計画申請（事前伺い）を提出したところ、文部科学省高等教育局国立大学法人支援課から六月一六日付で、「設置計画の内容に修正が必要とされる意見がつかっていない案件」として事前伺いの結果について事務連絡があり、学部・研究科改組が認可された。以下、今回の改組について概略を述べさせていただく。

1. 人文学部及び人文科学研究科改組の趣旨・必要性

人文学部は、昭和五三年、高等教育の普及に対応して、人文諸科学の専門的知識を学び、かつ幅広い教養を身につけた「人間性豊かな有為の人材」を養成するという時代的・社会的要請に応えるべく、文理学部を発展的に改組する。また、理学部とともに設置された。

情報化・グローバル化が著しく進むなかで、大学教育に対する期待や価値観は、近年ますます多様化し、学士課程教育に求められる内容は、単なる特定の専門知識・技能の修得から、より広範にわたる人文的教養に支えられた社会人基礎力に変容してきている。これを受けて本学部では、教育課程、教育組織及び教員組織の現状と課題の総合的な検証を進め、その結果、現在の社会的要求に十分に応えるためには、現行の二学科を人文学科一学科に改組し、教育課程を大幅に刷新することが不可欠であるとの結論に至った。

上記の社会的要請に応えるとともに、二学科制の問題点を解消するため、現行の人文社会学科、言語文化学科を一学科に改組することにより、「人間とは何か」を探究し、史料の読解・分析を通じた歴史観を培い、現代社会・地域社会の諸問題を探究する能力を涵養する機能（人文社会学科）と、「ことば」の本質を理解し、言語・文学・文化に対する考察力を深化させ、国際社会や異文化を理解する能力を涵養する機能（言語文化学科）を統合する。分野を再編統合した新コース制による履修設計と、複数分野の横断的、一体的学修体制を構築し、従来の二学科制では為し得なかった人材養成を行う。各コースを構成する専門領域は次のとおりである。

- ・哲学コース…西洋哲学、東洋思想史、美学・美術史、宗教学
- ・歴史学コース…日本史、東洋史、西洋史、考古学
- ・社会学コース…現代社会学、社会心理学、民俗学・文化人類学
- ・日本・中国言語文学コース…日本語学、日本文学、中国語学、中国文学
- ・欧米言語文学コース…英語学、英米文学、ヨーロッパ語学・比較言語学、ヨーロッパ文学・比較文学、言語学

また、人文科学研究科は、昭和六〇年、「より広い視野にたつて総合的かつ精深・高度な学識を授け、学術研究の成果をもって社会の要請に応える」ことを目的として、地域文化及び言語文化の二専攻で設置された。以来、社会の変化や学生のニーズに応じて、カリキュラム改訂などの改善を適宜図りながら、教育体制の整備に努めてきた。

情報化・グローバル化が著しく進むなかで、大学院教育に対する期待や価値観は、近年ますます多様化してきている。社会環境の激変や学生の質的变化をふまえて、本研究科では平成二三年度に大学院教育検討委員会を設置して、将来構想の設計に着手した。同委員会において、現状と課題を総合的に検証した結果、地方国立大学としての本研究科の果たすべき役割と機能

を再構築し、養成すべき人材像を明確にするためには、現行の二専攻を一専攻（人文科学専攻）に改組し、五研究コースから成る新たな体制を構築したうえで、教育課程を刷新することが不可欠であるとの結論に至った。

- 各研究コースを構成する専門領域は次のとおりである。
- 思想研究コース…西洋哲学、東洋思想史、美学・美術史、宗教学
- 歴史研究コース…日本史、東洋史、西洋史、考古学
- 現代社会研究コース…現代社会学、社会心理学、民俗学・文化人類学
- 日本・中国言語文学研究コース…日本語学、日本文学、中国語学、中国文学
- 欧米言語文学研究コース…英語学、英米文学、ヨーロッパ語学・比較言語学、ヨーロッパ文学・比較文学、言語学

2. 養成する人材像

改組後の人文学部においては、現在と未来をよりよく生きるための叡智を発見・創造する役割を担うとともに、それらを現実社会で実践することを可能とする人間力と社会人基礎力を有する人材を養成することを目的とする。具体的には、次のような能力や態度を身につけた人材を育てるための学士課程教育を展開する。

- ・社会や日常性、さらには自分自身を冷静に見つめ、相対的・批判的・複眼的に観察する能力
- ・常識や通説を鵜呑みにせず、真理に到達したいと願う知的探究心
- ・自ら課題を発見し、自分の力で解決しようとする知的能動性
- ・疑問に対して思考停止することなく粘り強く考え続ける知的体力
- ・異なるものを排除するのではなく、包摂する知的許容心
- ・テキストや社会事象といった対象を正確に分析・理解する能力
- ・対象を俯瞰的、多角的に観察・認識する能力
- ・自らの主張を自分の言葉で的確に表現・発信

するコミュニケーション能力
・物事を深く考察する基礎となる幅広い教養。社会人基礎力の基礎となるリテラシー能力
また、改組後の人文科学研究科においては、「人文科学全域を広い視野にいれながら、専攻分野の研究をさらに深化させ、高度専門職業人を育てる」という理念を根幹とし、「人間文化の根本原理を探究し、その多様な展開について思想、歴史、現代社会、日本・中国言語文学、欧米言語文学の各分野において深く解明する人を育成」という目標を掲げて、教育課程を展開する。

3. 改組後の学部・研究科の概要

教育課程の特色

人文学部の教育においては、専門領域の知識修得だけではなく、専門領域の学修を通じて身につけるリテラシー能力も社会人基礎力の形成に寄与している。そこで、教育課程編成の特色として、社会人基礎力としてのリテラシー能力養成をカリキュラム上に「リテラシー科目群」として位置づける。グローバル化に対応する外国語運用能力を含む、幅広い人文的教養の基盤を確立して社会人基礎力を涵養するためである。同時に、「リテラシー科目群」に、「能力基盤型カリキュラムシステム (YU JOB CG)」を導入することにより、学生に対して、リテラシー能力の到達度を可視化する。低年次における共通到達目標「人文コア科目」の履修が入学時に漠然としていた志望の確定につながり、履修可能な隣接諸分野の幅や可能性がこれまで以上に広がるため、幅広い人文的教養に支えられた深い専門知識をもって、急激に変容する現代社会のあらゆる局面で、困難を乗り越えて活躍できるゼネラリストの養成が可能となる。

人文科学研究科においては、一専攻になる利点を活かし、コースを横断した共通科目として、本研究科において基本となる素養を涵養することを目的とした研究科共通のコア科目「人文科学総論」及び修了後を見据えて知的財産、研究者倫理に関する知識を修得する研究基盤科目「知的財産特論」、「研究者行動規範特論」を

4. 入学定員
設定する。また、学部学生に一〇単位を上限とした大学院授業科目の先取り履修を認めることにより、六年一貫の教育体制を構築し、ストリートマスターの増加に向けて努力していく。

現 組 織			
学部	学科	コース	学位の分野 入学定員
人文学部	人文社会学科	哲学・思想	文 学 95名
		歴史学	
		社会学	
	言語文化学科	日本語学・日本文学	文 学 90名
		中国語学・中国文学	
		英語学・英米文学	
		ヨーロッパ言語・文学 言語情報学	
合 計			185名

新 組 織			
学部	学科	コース	学位の分野 入学定員
人文学部	人文学科	哲学	文 学 185名
		歴史学	
		社会学	
		日本・中国言語文学	
		欧米言語文学	

現 人文科学研究科				
研究科名	専攻名	研究分野	学位	入学定員
人文科学研究科	地域文化	思想文化論	修 士 学 学位 (文 学)	4名
		歴史文化論		
		現代社会分析論		
	言語文化	日本語学文学論		4名
		中国語学文学論		
		英語語学文学論		
		独仏語学文学論		
		言語学・言語情報学		
合 計			8名	

改組後 人文科学研究科				
研究科名	専攻名	研究コース	学位	入学定員
人文科学研究科	人文科学	思想研究	修 士 学 学位 (文 学)	8名
		歴史研究		
		現代社会研究		
		日本・中国言語文学研究		
		欧米言語文学研究		

(人文第四回卒・中国語学中国文学)

山口大学 創基二〇〇周年を祝う

一八一五年の長州藩士上田鳳陽による山口講堂の開設を嚆矢とする、山口大学の二〇〇年の歴史を祝って、「山口大学創基二〇〇周年記念式典・祝賀会」が平成二十七年五月三〇日(土)一四時より一八時まで市内のホテルにおいて盛大に挙行されました。

式典では、政界・経済界・卒業生・在学生・教職員等およそ二七〇人の出席のもとに、初めに岡正朗学長が、「地域の皆様のご支援により二〇〇年という節目を迎えることができた。これからも地元の自治体や企業とより深い連携を図り、県内の高等教育機関とも協働して地域に密着した人材育成や産業振興などを目指したい。一〇年後の二〇二五年には、多様性を許容し、新たな価値観を創造する、アジアの風を感じる「ダイバーシティ・キャンパス」の創造を目指す(山大HP)と式辞を述べ、続いて、安倍晋三首相(ビデオ)や下村博文文部科学大臣(代読)、地元選出の国会議員、村岡嗣政山口県知事からの祝辞がありました。

その後、学生代表の挨拶や寄附者銘板(レプリカ)の披露と感謝状・記念品の贈呈が行われました。最後に、直木賞作家で教育学部卒業の古川薫さんによる「わが連想拡大のルーツ」と題する記念講演を傾聴し、式典は大盛況のうちに閉会となりました。引き続き、吹奏楽部による演奏で始まった祝賀会では、岡学長の挨拶に続き、地元選出の国会議員や渡辺純忠山口市長からの祝辞があり、さらに、学生歌や寮歌、大学のイメージキャラクター「ヤマミイ」などが披露され、およそ三〇〇人の出席者は懇談のなかで、山口大学の創基二〇〇周年を盛大に祝いました。



祝賀会の様子

大学関連ニュース

(鴻文会が関わったもの)

第一七回山口大学同窓会理事会

- 平成二六年七月三十一日/Eメール審議/理事・岡光会長・内田副会長回答
- (一) 第一六回同窓会理事会の議事要旨の確認について
- (二) 平成二六年度山口大学同窓会事業計画について

- 第二回山口大学ホームカミングデーについて
- 山口大学と共催、経費の一部負担了承
- 第二回山口大学ホームカミングデー
- (一〇月四日一〇時〜一七時三〇分/山口大学吉田キャンパス/会員多数参加)

- 人文学部企画「茶話会および懇親会」(二四時〜一五時三〇分)
- 山口大学創基二〇〇周年記念誌『志』つなぎ伝える「二百年」発行
- (平成二六年一二月国立大学法人山口大学発行)

- 第二部に「文理学部」(二二六頁)、「人文

第四回山口大学創基二〇〇周年記念事業会

- (平成二七年一月二六日一五時〜一六時/事務局一号館特別大会議室/岡光会長出席)
- 第三回事業会の議事要旨の確認について承認
- 創基二〇〇周年記念事業の実施状況について
- 山口大学創基二〇〇周年記念募金の状況について
- 寄付者の顕彰について
- 山口大学創基二〇〇周年記念式典について
- その他

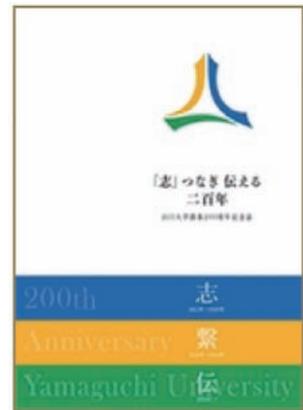
第一八回山口大学同窓会理事会

- (平成二七年一月二六日一六時〜一七時/事務局二号館特別小会議室/理事・岡光会長・内田副会長出席)
- (一) 第一七回同窓会理事会の議事要旨の確認について承認
- (二) 第二回ホームカミングデー実施結果について

- 併せて、同窓会からの支出状況について報告
- (三) 山口大学校友会(仮)について
- 設立に関する意見交換。内容再検討後改めて審議

- なお、一七時三〇分より同窓会理事会懇親会(学生食堂ホール)
- 山口大学卒業式
- (三月二〇日一〇時〜一三時三〇分/山口県スポーツ文化センター/岡光会長出席)
- 第一九回山口大学同窓会理事会
- (平成二七年五月二五日一五時〜一六時/事

- 学部」(一四一〜一四三頁)、「鴻文会」(二〇〇〜二〇四頁)について掲載



学部」(一四一〜一四三頁)、「鴻文会」(二〇〇〜二〇四頁)について掲載

- 事務局二号館特別小会議室/理事・岡光会長・内田副会長出席)
- (一) 第一八回同窓会理事会の議事要旨の確認について承認

- (二) 平成二六年度決算報告について
- (三) 平成二六年度会計監査報告について
- (四) 平成二七年度山口大学同窓会事業計画及び予算について

- (五) その他
- 創基二〇〇周年記念式典についての案内
- 山口大学創基二〇〇周年記念式典・祝賀会
- (平成二七年五月三〇日一四時〜一八時/山口グランドホテル/岡光会長出席)
- 山口大学理学部同窓会(鴻理会)講演会・懇親会
- (平成二七年七月二六日一四時三〇分〜一八時/ホテルニュータナカ/岡光会長出席)

第二〇回山口大学同窓会理事会

- (平成二七年九月二八日一四時三〇分〜一五時四〇分/事務局二号館特別小会議室/理事・岡光会長出席)
- (一) 第一九回同窓会理事会の議事要旨の確認について承認
- (二) 次期会長候補者の選考について
- 理事会互選とする
- (三) 第三回ホームカミングデーについて
- (四) 山口大学同窓会ホームページの作成について

- (五) 山口大学の動向について
- (六) 山口大学創基二〇〇周年記念募金状況について
- 山口大学基金について
- 山口大学創基二〇〇周年記念基幹シンポジウムについて

- 第三回山口大学ホームカミングデー
- (一〇月三日一〇時〜一七時三〇分/山口大学吉田キャンパス/会員多数参加)
- 人文学部企画「退職教員を囲むOB/OG、現職教員、在学生、高校生の交流会」(一一時〜一四時三〇分)

鴻文会、この一年



会長 岡光 一浩

人文学部と旧文学部文学科の卒業生を正会員として構成されています。同窓会「鴻文会」、その誕生から早や三十四年が経過し、現在の正会員数はおよそ八六〇〇に達しています。今年度もこの時期、例年のように、会員の皆さまとの毎年の繋がりを大事にしたいという思いで、編集委員会を中心に会報「鴻文」の作成に取り組んでおります。一二月下旬には第三五号をお手元にお届けします。

役員会の一年の主な活動は、年度初めに開催されます役員会での協議と、会報の作成ですが、この一年を振り返ってみますと、山口大学創基二〇〇周年に関する会議や催し物への参加の多さが目立ちます(別掲「大学関連ニュース」参照)。今年五月三〇日に市内のホテルで盛大に開催されました「山口大学創基二〇〇周年記念式典・祝賀会」の様子等につきましても、本会報でも簡単に紹介しております。また昨年一二月には、「創基二〇〇周年の記念誌が『「志」つなぎ伝える二百年』と題して刊行されました。この記念誌には、二〇〇年の山口大学の歴史が三〇〇頁にわたって写真と文によって綴られています。この中で鴻文会も、五頁にわたって誕生からの歩みを振り返っております。

前号の会報は編集委員諸氏のご尽力によって一二月下旬に皆さまのもとにお届けできましたが、その会報ではご覧のように、巻頭を岡正朗学長の心温まるご挨拶と「山口大学創基の地」記念碑の写真および説明文で飾り、併せて、一〇月四日に行われました第二回山口大学ホーム

四月中旬に役員会を開催し、昨年度の事業報告や決算等の審議を行うとともに、本年度の事業計画や予算等を決定いたしました。詳細は別掲の説明等をご覧ください。例年とあまり代わり映えない活動内容ですが、二〇〇周年記念に際しての会議出席に加え、寄付金等の支出が若干増加傾向にあるようです。諸般の事情にかんがみ、何卒、ご了承くださいませよう、お願いいたします。なお本年四月より、事務の小野早苗さんの勤務日が、月・火・木曜日の午後一時より五時までに変更になりました。小野さんにはこれまで、鴻理会と共同で仕事をお願いしておりますが、四月より鴻文会のみのお仕事を願うことになりました。皆さまのご理解とご理解をよろしくお願いいたします。

去る一〇月三日、第三回の山口大学ホームカミングデーが吉田キャンパスで開催され、人文学部でも学部企画として「退職教員を囲むOB／OG、現職教員、在学生、高校生の交流会」



役員会の様子 (H27/4/18)

が学部教員のご尽力によって開催され、出席者およそ七〇名が退職教員のお話に耳を傾け、愉しく歓談しました。その紹介は別掲のとおりですが、今後、より多くの卒業生の出席がますますよう、ご案内等を再考してまいります。良き方法等がありましたら、ご教示をお願いいたします。

鴻文会では、会員相互の親睦と交流の活性化のために、研究室等の集まりに若干の経済的助成をしております。本会報にも助成の要綱を載せておりますので、何卒、奮ってご活用いただけますように。また、鴻文会の活動の推進のために「賛助会員」制度を設け、毎年、多く会員の方々から協力をいただいております。このことに対して心から感謝申し上げますとともに、今後とも、ご支援をいただきますよう、よろしくお願いいたします。併せて、会の活動や本会報、ホームページ等につきましても、ご教示・ご指導をお願いいたします。

(文理第一四回卒・ドイツ文学)

鴻文会会則

(昭和五十六年一〇月三十一日制定)

(総則)

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市

平井七七三―二 沖田ビル二〇二におく。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 会報及び会員名簿の発行
2. 会員相互の連絡、親睦の増進
3. その他必要と認められる事項

(会 員)

第四条

1. 正会員 山口大学文学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学研究科修了者

2. 準会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学研究科院生
3. 特別会員 山口大学文学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官

(会 費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。

1. 会 長 一名
2. 副会長 二名
3. 委 員 若干名
4. 監 事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。

1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。
2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。

3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。

第八条 委員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部経験者(本会正会員)ならびに会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

1. 事業の報告
2. 会計報告
3. 役員を選出
4. 会則の改正及びその他の重要事項

(支 部)

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則

この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。

この会則は平成九年八月二三日より改正施行する。

この会則は平成二五年八月一七日より改正施行する。

作陶のたのしみ



副会長 兼清 仁志

昨年三月に定年退職した後、器作りを生活の中心に置いた日々を送っています。退職後の生活を考えた時の条件は「ずっと働き続けられること」「生活のあり方を自分で決められること」「時間を自由に配分できること」、そして出した結論が今の生活でした。これはつまり、究極のわがまま生活ですが、おかげさまでほとんどストレスを感じないで済む日々を過ごせています。

陶芸を始めたのはもう二〇年以上も前です。途中で止めることなくずっと続けてゆくうちに、楽しみも増え、人と出会う喜びもありました。話題が増えたというのも御利益の一つでした。そうして二〇年も経つ頃には生活の一部になっていたのです。

作陶の楽しみはもちろん「ものづくり」にあります。自分の思い描いた形を土で作り上げ、形を整え、時には絵を描き、着色し、そして生活に役立ててゆく。その過程をすべて自分で行う訳ですから、窯から出した時の充実した感覚は他にたとえようがありません。手でものを作る行為を続けてゆくことでわかってきたことがいくつもありました。そのひとつは「深化」ということでした。自分がどんなものが好きなのか、自分が何を作りたいのか、はじめは頭の中で漠然としていたものが土を通して具現化されてきます。そして、それを実現してゆくための課題がはつきりしてきます。実際に作り上げてみると更に改善したいと思う箇所が見えてきます。たくさんさんの失敗といくらかの満足を何度も何度も繰り返してゆくと、更に細かな具体的目標が現れてきます。その繰り返し「手でもの

を作る」ことだと思ふようになってきました。目的の地にたどり着いたと思つたら、更に新しい目的の地が遠くに見える、そんな感じですね。

もうひとつは、「形へのこだわり」ということです。たとえば「茶碗」と「飯碗」はどう違うのでしょうか。「碗」の前につくのが「茶」か「飯」ですから、これは使用目的から付けた名称です。茶を喫すれば茶碗、飯を食べれば飯碗、つまり使用者がそれを決める訳ですが、「茶」も「飯」もその背景に膨大な人間的文化的歴史を背負っています。飯碗にさほど気を留める人は少ないでしょう。茶碗は鑑賞(拝見)の対象になります。その違いを作る側から考えると、気の遠くなるような隔たりがあるような気がしています。わずか一ミリの器体の膨らみやほんの少しの色の加減が気になります。目が肥えたのでしょうか、それともこだわりが強くなったのでしょうか。

ともあれ、器作りの仕上げはすべて火にゆだねます。もちろん焼成もコントロールしますが、出上がるときには祈るしかありません。サインを入れて絵筆を置く平面芸術とは納得の仕方が少し違う気が自分ではしています。うまくいかなければ繰り返し作ればよいといったようなフアジーな気分が、今の自分に合っているのかもしれません。

紙面をお借りして、僭越ではありますが展示会のお知らせをさせていただきます。六月中旬、後河原のギャラリーで展示会を企画しています。一の坂川のせせらぎを耳に、散歩がてら立ち寄っていただければ幸いです。

(文理第二五回卒・中国哲学)



鴻文会役員

平成二五年八月〜平成二九年八月

名譽会長

根ヶ山 徹(人文学部長)

会長

岡光 一浩(昭四一年卒・ドイツ文学)

副会長

内田 光邦(昭四二年卒・英米文学)
兼清 仁志(昭五二年卒・中国哲学)

顧問

和田 敏英(昭二八年卒・英米文学)
大塚 博久(昭三一年卒・中国哲学)
大野 光生(昭三一年卒・中国哲学)
田中 晋(昭四一年卒・英米文学)
添田建治郎(昭四四年卒・国文学)

委員

赤梨 和則(昭四二年卒・西洋哲学)
兼清 仁志(兼)(昭五二年卒・中国哲学)
原口 公康(昭六三年卒・日本思想史学)
山本 明史(昭六三年卒・国史学)
山本 達夫(昭六〇年卒・西洋史学)
斎藤 禎(昭六一年卒・東洋史学)
林田 徳夫(昭五七年卒・社会学)
和崎 睦子(昭六六年卒・社会心理学)
大谷 泰子(昭一三年卒・社会情報論)
正分あゆみ(昭一六年卒・博物文化論)
青島 啓(昭一〇年卒・博物文化論)
鈴木千登世(昭五九年卒・国文学)
藤井 浩子(昭二五年卒・中国語学中国文学)
中村 匡宏(昭九九年卒・英米語文化論)
池田 容子(昭九九年卒・英米語文化論)

井上 恵(平五年卒・ドイツ語学)
浅野 靖(昭五七年卒・フランス語学)
中村稚恵利(平一三年卒・言語情報論)

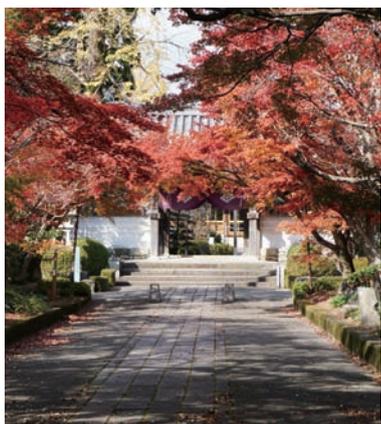
監事

村田 博(昭四二年卒・社会学)
渡邊 早苗(昭五九年卒・西洋史学)

学内委員

根ヶ山 徹(昭六〇年卒・中国語学)
中国文学)
村田 裕一(平三年卒・考古学)

文理学部文学科第一五回(昭和四二年社会学)卒業の村田博さん(元県議会事務局長)が、永年にわたる地方自治功勞の功績により、
平成二七年度秋の瑞宝小綬章を受賞されました。
村田さんは現在も、鴻文会の監事として、本同窓会のためにご尽力いただいています。
心からお祝い申し上げます。



山口市大殿 龍福寺

◎平成26年度事業報告

1. 正副会長会議 (5/2) (9/6)
2. 第3回 (5/16) ・第4回 (1/26)
山口大学創基200周年記念事業会
3. 第16回 (5/16) ・第17回 (7月メール審議) ・第18回 (1/26)
山口大学同窓会理事会
4. 第44回役員会 (5/17)
5. 会報「鴻文」編集会議 (9/6) (11/8)
6. 第2回山口大学ホームカミングデー
および人文学部教員・在学生・卒業生交流会 (10/4)
7. 会報「鴻文」第34号発行 (12/15) および配布
8. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式 (3/20)
9. その他.

◎平成27年度事業計画

1. 正副会長会議 (4/18)
2. 役員会 (4/18)
3. 第19回 (5/25) ・第20回 (9/28)山口大学同窓会理事会
4. 山口大学創基200周年記念式典及び祝賀会 (5/30)
5. 留学生奨学金授与式 (未定)
6. 会報「鴻文」編集会議 (9/5) (11/7)
7. 第3回山口大学ホームカミングデー
および人文学部教員・在学生・卒業生交流会 (10/3)
8. 会報「鴻文」第35号発行 (12月予定)
9. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式 (3/22)
10. その他

◎平成26年度決算

収入総額	4,179,804円
支出総額	2,067,537円
残高 (次年度繰越金)	2,112,267円

◎平成27年度予算

〈収入の部〉

科 目	26年度予算額	決 算 額
繰越金	1,752,605	1,752,605
会費収入	1,800,000	1,860,000
賛助金	300,000	265,540
繰入金	0	300,000
雑収入	7,395	1,659
合 計	3,860,000	4,179,804

〈収入の部〉

科 目	27年度予算額	摘 要
繰越金	2,112,267	
会費収入	1,800,000	10,000×180人
繰入金	0	特別会計より繰入
賛助金	300,000	
雑収入	7,733	利子等
合 計	4,220,000	

〈支出の部〉

科 目	26年度予算額	決 算 額
会議費	100,000	46,792
役員等行動費	100,000	18,645
事務所運営費	850,000	849,801
事務費・通信費	150,000	151,901
会報費	700,000	675,662
ホームページ維持費	50,000	27,734
分担金	151,000	150,864
寄付金	100,000	100,000
奨学金	151,000	0
助成金	100,000	24,296
慶弔費	50,000	21,842
予備費	1,358,000	0
合 計	3,860,000	2,067,537

〈支出の部〉

科 目	27年度予算額	摘 要
会議費	100,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役員等行動費	100,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事務所運営費	850,000	家賃、人件費、事務所経費(電話・電気その他)横断幕
事務費・通信費	150,000	封筒印刷6,000枚、事務印刷、郵送、消耗品、雑費
会報費	700,000	印刷6,500部、発送5,500通、発送アルバイト代
ホームページ維持費	50,000	プロバイダー契約料、メールウイルスチェック料、その他
分担金	151,000	山口大学同窓会(手数料含む)
寄付金	100,000	山口大学教育財団「日中学術交流基金」
奨学金	151,000	留学生への支給(手数料含む)
助成金	100,000	「同窓会等」開催助成(手数料を含む)
慶弔費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、香典料、弔電、その他
予備費	1,718,000	
合 計	4,220,000	

〈特別会計〉

科 目	25年度財産	26年度財産
中国電力債	1,465,537	1,465,537
定額預金	2,950,000	2,650,000
合 計	4,415,537	4,115,537

〈特別会計〉

科 目	27年度財産	摘 要
中国電力債	1,465,537	東洋証券
定額預金	2,650,000	
合 計	4,115,537	

平成27年4月16日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 村田 博
渡邊 早苗

人文学部教育職員紹介

(平成二七年一月現在)

学部長(併) 根ヶ山 徹

○人文社会学科

哲学・思想コース

教授 高木 智見
教授 脇 靖弘
教授 Aam Djumali
教授 柏木 寧子
教授 藤川 哲子
教授 栗原 剛
准教授 村上 剛
准教授 横田 蔵人

歴史学コース

教授 橋本 義則
教授 田中 晋作
准教授 滝野 正二郎
准教授 藤永 康政
准教授 真木 裕一
准教授 村田 裕太
准教授 池田 勇太
講師 石田 雲泰
講師 南雲 輔

社会学コース

教授 坪郷 英彦
教授 横田 尚俊
教授 高橋 征仁
准教授 速水 聖子
准教授 岡邊 健吾
准教授 谷部 真吾

○言語文化学科

日本語学・日本文学コース

教授 林 伸一
教授 平野 芳信
教授 和田 弘学
教授 森野 正弘
准教授 尾崎 千佳
准教授 野坂 昭雄
講師 安本 真弓

中国語学・中国文学コース

教授 富平 美波
教授 根ヶ山 慎一
准教授 更科 一徹

英語学・英米文学コース

教授 岩部 浩三
教授 太田 聡
教授 宮原 成一
教授 池園 宏

ヨーロッパ言語・文学コース

教授 Hintereder Ende Franz
教授 武本 雅嗣
准教授 下寄 正利
准教授 Michel de Boissieu

言語情報学コース

准教授 Phillips John David
准教授 乾 秀行

図書館司書養成課程

准教授 松田 泰代

学生数

(平成二七年一〇月現在)

人文学部

	人文社会学科	言語文化学科	合計
1年	102人	100人	202人
2年	100	90	190
3年	99	88	187
4年	120	112	232

人文科学研究科

	地域文化専攻	言語文化専攻	合計
1年	4人	2人	6人
2年	5	3	8

平成二六年度
学部卒業生・大学院修了生の進路状況

	学部卒業	大学院修了
宿泊業・飲食サービス業	3人	人
教育・学生支援業	11	2
医療・福祉	7	
複合サービス事業	4	
サービス業	6	
公務	28	1
上記以外	0	
進学	5	

	学部卒業	大学院修了
建設業	0人	人
製造業	11	
情報通信業	9	
運輸業・郵便業	9	
卸売業・小売業	17	
金融業・保険業	8	
不動産業・物品賃貸業	7	
学術研究・専門技術サービス業	4	

ご退任教員挨拶

山口大学での

二昔を振り返って



林 伸一

一九九三年四月に山口大学教養部の日本語・日本事情担当教員として採用されて、もう二二年たった。一〇年一昔というが、すでに二昔を過ぎたことになる。当時、研究一号館の三階に研究室があった。赴任二年目からは、教養部の教員であると同時に研究一号館一階の学生相談所の所員となり、やがて所長となつてからは、研究室にいる時間より相談所にいる時間の方が長くなつていった。

人文学部に移籍後は、人文棟二階に引っ越した。耐震化工事中は、大学会館隣の難民プレハブ棟にいたが、工事後は天国に一番近い人文棟六階に研究室が変わった。最上階の六階のほうが、眺めがよく居心地もいい。土曜日も通っていた研究室に退職後も行きたくないのではないかと家内が心配している。

教養部時代は、ゼミ生はいなかったが、日本語教師志望の学生を集めて自主ゼミや合宿をやっていた。その中から三人が日本語教師になり、今でも連絡を取り合っている。

人文学部のゼミ生としては、日本人学生が多かったが、大学院生や研究生となると中国の留学生が多かった。その中からは、他大学院に進み、博士号を取った者も何人かいる。その内、本年の日本語教育学会大会で堂々と研究発表した者もいて、世代交代を実感した。

私が人文の他の教員と違うのは、日本語学校の教員、専門学校教員を経て、大学の教員になったことだろう。日本語教育だけでなく、教

育カウンセリングも専門としていて、二足の草鞋を履いていると思われた。日本語学だけでなく、日本事情も担当していたため多方面に雑学的に関心を持つようになった。

研究者というより日本語教育やカウンセリングのことを一般の人にも広く知ってもらおうと思って、広報担当がジャーナリストのような面を持つていたように思う。若い頃は実際にジャーナリストになろうかと思つた時期もあり、日本ジャーナリスト専門学校に夜間通つて、編集技術を習った。それで学会誌や日本語教材などを編集することが苦ではなく、むしろ楽しかった。全国語学教育学会の『山口支部研究紀要』全十巻や地域日本語テキストの『おいでませ山口』全五巻を監修・編集した。カウンセリングの分野では『エンカウンター研究』全十巻、日本語学のテキストも兼ねて『現代日本語文化論』全六巻を編集・制作した。後者も全十巻まで出す予定であったが、未完の部分は退職後の課題とした。冊子体には修士論文だけでなく学部生の卒業論文や授業写真も入れるようにした。

自慢ではないが、単著の本は一冊もなく、共著の本が多い。論文では、単著のものもあるが、共著も多い。人文学部の風潮としては、単著主義といつてもいいほど、単著を重視しているが、私は共著の方が多角的に内容を検討でき、弁証法的によりいいものができるように考えている。それが、異質なものの同士のぶつかり合いを重視する構成的グループ・エンカウンターにの精神にも合致すると思つている。

エンカウンターとは「出会い」「邂逅」のことであるが、それを卒論のテーマにした卒業生から「教え子としては先生に出来るだけ長く現役を続けていたきたい」とのメッセージもらつている。

しかし、三月五日の午後三時から五時の最終講義を人文学部の小講義室で行うのを最後に私も山口大学人文学部を卒業することとなる。

(日本語学・日本文学コース 教授)

ご新任教員挨拶

着任のご挨拶



安本 真弓

平成二六年一〇月一日付で、人文学部言語文化学科日本語学・日本文学コースに着任いたしました安本真弓と申します。着任して以来、同僚の先生方や事務の方々に大変お世話になっており、数多くの不躰な質問や相談に懇切丁寧に応じていただいておりますことに、この場をお借りしまして御礼申し上げます。また、鴻文会の皆様にもご挨拶させていただきます。どうか宜しくお願ひ申し上げます。

私の専門は日本語学であり、古代語やその変遷を主に担当しています。その中でも特に興味を持つていますのは、言語変化のあり様を明らかにすることです。そのきっかけは、高校生の作文指導をしていた際に、その感情表現が非常に類似していることに気がついたことです。「嬉しかった」「面白かった」「悲しかった」「苦しかった」「辛かった」、このような表現を多くの高校生が同一に用いていました。しかし、古典作品を見ますと、「辛い」「苦しい」というマイナスの感情だけでも、「あいなし」「あへなし」「うし」「こころうし」「ものうし」「わびし」「わりなし」など多くの表現が見られます。人間の感情のあり方は、おそらく古代人も現代人もそれほど差がないと考えられますが、それを表す単語の種類に違いが見られるのはなぜでしょうか。

このような疑問から、私の研究生生活は始まりました。修士論文では感情を表す形容詞と動詞に着目し、平安・鎌倉時代の和文作品におけるあり様を検討しました。博士論文では、修士論

文をさらに発展させ、形容詞と動詞の全般的な歴史を明らかにしようと思ひ、取り組みました。

一例を挙げますと、古代語では現代語よりも感情形容詞と感情動詞の対応が多いといった現象が見つかりました。古代日本語には、「あさし」と「あす」、「かなし」と「かなしがる」、「なほし」と「なほす」、「ふるし」と「ふる」のように、現代日本語では見られない形容詞と動詞の対が存在するのです。また、連体修飾・連用修飾・述語といったどの構文位置に形容詞が現れるのかという点においても、形容詞の意味によって違いが見られ、さらに歴史的变化があったこともこれまでの調査から分かりました。

そこで、このような形容詞と動詞の対が現代語よりも古代語で多く見られるのはなぜかといったことを各品詞の性質を追究する中で明らかにし、古代語用言に特有の文法的性質や現代語につながる変遷を明らかにすることが現在の私の研究テーマです。

このような研究活動を通じ、私が学生の皆さんに伝えたいことは、一つは、学問への興味・関心のヒントは身近なところにあるということです。日本語学であれば、平日頃から、自分や周囲の人々の言葉に着目してみましよう。それが卒業論文のテーマを見つめる一番の近道だと思います。日本語の歴史や言葉変化の仕組みを明らかにする方法を知ること、身近な日本語の疑問を言語変化という側面から説明することができるのです。二つ目は、言葉は必ず変化するのであり、そこには何らかの法則性が見られる場合があるということです。また、その法則から外れる例外が見られる場合も、その例外理由を説明できる場合があり、その説明がとても重要な意味を持つてきます。つまり、言葉にも科学的な側面があるのです。

授業では、日頃何気なく使っている日本語の奥深さを、ことばの歴史や変化という側面から、学生と一緒に考えていくことを目標として行つていきます。最後になりますが、まだまだ未熟者ですの

で、皆さま、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしく
お願い申し上げます。
(日本語学・日本文学コース 講師)

山大との浅からぬ縁



野坂 昭雄

平成二七年四月一日付で人文学部言語文化学
科日語・日文コースに着任いたしました、野坂
昭雄と申します。どうぞよろしくお願いいたし
ます。専門分野は日本近代文学、特に近代詩
で、中でも大学の卒業論以来のテーマは「わがひ
とに與ふる哀歌」で知られる詩人の伊東静雄で
す。

文学研究を志すようになったのは、現在は地
元で古書店を営んでいる父の影響です。父は学
生時代、仏文学を専攻しており、決して子供に
文学を押しつけるようなことはしませんでした
が、私は自然とその道に進むようになっていま
した。ちなみに、自分を名乗った後、「父は作
家の野坂昭如です」というと、一瞬信じてもら
えることがあります。尋ねたことはありません
が、文学好きの父が有名作家を意識して名付け
たのかもしれない。

ところで、私は着任前から、山口大学とは不
思議な縁がありました。山口に来る前に一五
年間、私は大分市にある短大に勤めていまし
たが、平成四年にその短大に人文系二学科が新設
され、国際文化学科初代スタッフとして着任さ
れたのが、山口大学を定年退職なさったばかり
の水本精一郎先生でした。先生は短大での八年
間、山口と大分を行ったり来たりしながら、学
生の指導や大学運営に尽力なさいました。先生
のご専門は島崎藤村でしたが、伊東静雄の論文
もお書きになっていて、そうした先生の後任と
して私が大分に参ったことにも、何かしら縁

のようなものを感じておりました。短大に着任
する直前、平成一二年三月末に、研究室の片付
けをなさっている先生の元を訪ねた際、先生か
ら伊東静雄の詩の生原稿を見せていただいた時
には、心から驚きました(原稿は後に日本近代
文学館に寄贈されましたが、私はコピーをいた
だきました)。そして実際に住吉中学で伊東静
雄の授業を受けたこともあるというお話を聞
き、さらに驚いたのでした……

その後、山口大学国語国文学会で、川端康成
『雪国』と島崎藤村『夜明け前』について、二
度の発表の機会をいただきました。また、一の
坂川沿いの老舗旅館(惣野旅館)で、先生主催
の合宿(?)に参加し、中野重治や横光利一に
ついて山大卒業生の方々と議論したことも、懐
かしい思い出です。その私が、先生とは逆に、
大分から山口へ来ることになったのは、やはり
縁としか言いようがありません。そうしたわけ
で、今は亡き水本先生に叱られぬよう、山口大
学での教育と研究、その他の仕事に全力で取り
組もうと気を引き締めている毎日です。

国立大学法人の人文系学部に対する風当たり
が強い昨今ですが、文学を学ぶ楽しさを学生と
共有しながら、ここを巣立つ彼ら/彼女らが人
文学部で学べてよかつたと思えるような場を作
ることに努めていきます。さいわい山口には、
中原中也や金子みすゞといった詩人、俳人の種
田山頭火、小説家では嘉村礪多が生まれ、国木
田独歩が幼少期を過ごすなど、多くの文学者を
育んだ豊かな文学的風土があります。縁のある
山口大学の恵まれた環境で、学生と一緒に文学
に取り組む機会をいただけたことに、心から感
謝しています。山口に来てからも、いろいろな
方のご縁を感じることが数々ありました。こ
れから出会う人々との繋がりが大切にならな
い、山大での日々を過ごして参ります。

最後になりますが、人文学部をさまざまな面
で支えて下さっている鴻文会会員の皆様には、
これからのご指導とご支援を何とぞよろしくお
願い申し上げます。

(日本語学・日本文学コース 准教授)

ご挨拶



谷部 真吾

平成二七年七月一日付で人文学部に採用とな
りました、谷部真吾と申します。私の専門は、
民俗学・文化人類学であり、主に日本の祭りの
変化を研究対象としております。一般に、祭り
は、「日本の伝統文化」あるいは「日本人の心
のふるさと」といわれることがあります。この
ような表現からいえますと、祭りは、「昔か
ら変わることなく続けられてきた行事」として
イメージされていると聞いていいでしょう。し
かし、日本各地に伝わる祭りを丁寧に調べてい
きますと、そのほとんどが大なり小なり変化し
ていることがわかってまいります。そのような
変化が、いかなる理由で、どのように生じたの
かを詳細に分析していくことで、日本文化や日
本社会の特徴を明らかにすることができないか
と考へ、研究を続けております。

私自身は、生まれも育ちも埼玉県であったこ
とから、これまでのほとんどを関東地方で過ご
してまいりました。一時期、仕事の関係で名古
屋にも住んだことがありましたが、それより西
にご縁はありませんでした。このため、山口
は、私にとりまして未知の土地。それでも、お
かげさまで、今日までつつがなく過ごしてお
ります。山口での暮らしはあわただしく、瞬く間
に一日が過ぎていきますが、赴任当初に比べ
て、ずいぶん落ち着いてまいりました。ようや
く、研究にも本腰を入れられそうです。山口県
内には、さまざまな祭りがありますので、まず
はその現地調査から始めてみたいと考えており
ます。鴻文会の会員のみなさまの中に、県内外
を問わず、興味深い祭りについてご存知の方も
しくは関係者の方がいらっしやいましたら、ぜ
ひご教示いただきたく、お願い申し上げます。
一方、教壇に立つ身といたしましては、自己

の研究だけでなく、教育も充実させなくていか
なくてはなりません。私が本学で講義を担当す
るようになってから、まだ数カ月しかたつてお
りませんが、よくいわれますように、人文学部
の学生たちにつきましては「まじめだが、おと
なし」という印象をもっております。そうし
た学生たちが、前のめりになるような講義は、
いかにして可能なのか。その講義の中で伝える
べき知とは、どのようなものなのか。現在は、
そういったことを考えながら、よりよい講義の
あり方を模索している最中です。

みなさまもご存知の通り、このところ、人文
社会科学系学部を取り巻く環境は厳しさを増し
ております。この逆境を乗り越えるためには、
社会が必要とされる人材を輩出することが求め
られていると承知しております。そのために、
教員である私が微力を尽くすのは当然のことと
はありますが、できましたら、みなさまにもお
力をお貸しいただきたく、お願い申し上げます。
ホームカミングデーなどの際に、ぜひご来
校いただき、後輩たちを叱咤激励していただ
けないでしょうか。あわせて、私個人へのご指導
・ご鞭撻も賜りたく、重ねてお願い申し上げま
す。

近々、みなさまにお目にかかれまことを、
心より楽しみにしております。今後とも、よろ
しくお願い申し上げます。まずは、ご挨拶ま
で。

(社会学コース 准教授)



山口大学 共育の丘

平成二十七年 山口大学人文学部 生涯学習事業

山口大学人文学部は、地域社会との交流を深め、幅広い年齢層の豊かな教養の保持と知的向上のために、今年度も次のような事業を行っています。

(一) やまぐちサタデー・カレッジ(公開講座)
人文学部の特色を生かした公開講座として平成一三年度に始めました「やまぐちサタデー・カレッジ」も、お陰様で今年一五年目を迎えました。今年度は前期一講座、後期一講座の計二講座を開講し、総計四〇名ほどの方々に聴講いただいています。山口市周辺だけでなく、県内の遠方からの受講者もいらっしやいます。

前期 五月二日〜八月一日(毎月第一土曜日計四回) 一三時三〇分〜一五時

会場 山口大学吉田キャンパス・就職支援施設大原教室

田中晋作教授「やまぐちサタデー・カレッジ二〇一五 日本列島における古代国家形成―山口、近畿、そして東アジア―」

1. 考古学の有用性と限界―モノの移動によって生じるさまざまな関係
2. 魏・西晋の威信によって政権を維持した大和盆地東南部地域の勢力
3. 朝鮮半島東南部地域の勢力との軍事的関係を背景に台頭した大和盆地北部地域の新勢力
4. 朝鮮半島への大規模な軍事介入を基軸に勢力を伸張させた百舌鳥・古市古墳群の勢力

内容
古墳時代の外交と軍事を手がかりにして、日本列島における古代国家形成について考古学的な視点から考えます。具体的には、当時の東アジア情勢を踏まえ、山口県域を含む日本列島の諸勢力間でみられる三角縁神鏡や筒形銅器と

いった威信財の移動、また最新の武器の生産や供給がどのような要因によって生じ、それによってどのような関係が成立したかを明らかにし、古代国家形成の過程を跡づけます。



後期 一〇月三〇日、十一月一日〜二八日(土曜日 計四回) 一三時三〇分〜一五時

会場 山口大学吉田キャンパス・就職支援施設大原教室

松田泰代准教授「やまぐちサタデー・カレッジ二〇一五『解体新書』の出版とその周縁―日本近世商業出版の様態を垣間見る―」

1. 二つの『解体新書』―版と刷
2. 須原屋市兵衛と『解体新書』―著作成立過程と出版
3. 『解体新書』と『物類品隲』にみる板木のはなし―板木流通と版權
4. 二人の須原屋市兵衛―初代と二代目



内容

日本近世期は、商業出版が成立し興隆した時代です。江戸の書肆須原屋市兵衛の出版活動から、出版の制度や機構、文化について論じます。また、須原屋市兵衛が出版した『解体新書』は、内容については数多くの研究がなされていますが、物としての書誌学的解明をおこなっています。

来年度も前期・後期に開講する予定です。詳細は、三月頃発行されます受講案内をご覧ください。

(山口大学地域未来創生センター)

電話 083-9333-5059

<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>

(二) 山口大学公開講座(防府市)

平成二四年度から防府市の生涯学習事業に参加しております。今年度は、九月一日(土)と九月二六日(土)に、防府市文化福祉会館にて、次の講座を実施しました。

真木隆行准教授「中世の防府天満宮とその絵巻物」

内容

防府天満宮には、「松崎天神縁起絵巻」という鎌倉時代末期に成立した有名な絵巻物が伝わっています。これにはどのようなシーンが描かれているか。当時の防府天満宮はどのような姿で描かれていたか。その後の社殿はどのような変遷を遂げたか。このようなことについてお話ししました。最終回には、その説明を踏まえながら、防府天満宮を実際に見学しました。

1. 「松崎天神縁起絵巻」第一〜五巻を読む(九月一日一三時〜一四時一五分)
2. 「松崎天神縁起絵巻」第六巻を読む(同日一四時二五分〜一五時四〇分)
3. 防府天満宮のその後の変遷(九月二六日一三時〜一四時一五分)
4. 防府天満宮の現地見学(同日一四時二五分〜一五時四〇分)

(三) 出前講義

山口大学では、大学教員が各地の学校に出向いて専門的な内容をわかりやすく講義する、いわゆる「出前講義」を実施しております。今年度、人文学部教員が出講した出前講義は、山口県および広島県の高校からの依頼に応じ、計四件行っています(一〇月末時点で実施済みまたは派遣決定の件数)。

来年度も、今年度同様、地域社会の要望に応じてまいります。教員の講義できる領域などを掲載した資料がありますので、お気軽にお申し出ください。

(山口大学地域未来創生センター)

電話 083-9333-5059

<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>

(四) 開放授業

大学の授業そのものを一般の方に開放する「開放授業」は、山口大学エクステンションセンター(現・地域未来創生センター)の事業として平成一八年度から始まりました。今年度は、人文学部の教員から計九件の開放授業を用意しました。

科目名や科目数などは未定ですが、来年度もいくつかの授業を開放する予定です。詳細は地域未来創生センターのホームページなどをご覧ください。

(山口大学地域未来創生センター)

電話 083-9333-5059

<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>

(人文学部生涯学習推進室長 宮原一成教授)



恩師健在

漱石のことなど



石井 勇

私は長く教養部に居り、人文学部は定年前の三年間だけお世話になりました。先日、岡光先生からご依頼を受け駄文を呈する次第です。もう一〇年くらい前になりますが、「文学概論」の授業を非常勤講師として担当したことがあります。その折に柄にもなく夏目漱石を取り上げました。かねてから、定年にならば漱石をもう一度じっくり読んでみたいと思っていたことも事実です。今回、先の講義の補充のつもりで書いてみます。

文学用語に「ビルドゥングスroman」(Bildungsroman)というのがあります。「教育小説」として英和辞典にも定着しているようです。ドイツ語由来の原義は「人間形成小説」とでも言えばよいでしょう。ゲーテの『ザイルヘルムマイスター』(「修業時代」)、「遍歴時代」が揃うのは一八二九年)が古典的拠り所だと言われています。私の知る限り漱石がこの用語をどこかで使用した形跡はありません。名称はともかく、人間形成を扱う文学作品は洋の東西、時代の新旧に亘って共通するものが無数にあります。この用語の含む所はより意図的な設計図が準備されていることだと思えます。私自身少しイギリス小説をかじった経験から見ると漱石は西欧の小説に親しみ、同時にこれに鍛えられたなと思わせるところが顕著です。主人公の試練と成長に注目しながら、『三四郎』の最初の辺りを覗いて見ましょう。彼が熊本から上京する際、車中で出会った「髭の男」(後の広田先生、渾名は「偉大なる暗闇」と)との対話の場で、日露戦争以後の日本が話題になっています。

「然し是から日本も段々発展するでせう」と三四郎が言うと、相手は「亡びるね」と言う。更に、

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より」で一寸切ったが、三四郎の顔を見ると耳を傾けてゐる。

「日本より頭の中の方が広いでせう」と云った。「囚はれちや駄目だ。いくら日本の為めを思つたつて鼻眞の引き倒しになる許りだ」

此言葉聞いた時、三四郎は真実に熊本を出た様な心持ちがした。

(漱石全集第五巻、岩波書店、一九九四年、ルビは省略)

今後主人公のさまざまな種類の試練が始まるべく、その前段となる場が印象深く描かれています。漱石自身が嘗めた辛い留学体験、否応なしの視野拡大が響いているようにも思います。また三部作とも称される『三四郎』、『それから』、『門』を各主人公の試練を時間軸にして一本の糸にしてつなげてみると面白いと思えます。ちなみに、昨年(二〇一四年)一月から朝日新聞が「一〇六年ぶりの連載」と銘打って三部作を順次当時と同じ回数に分けて連載を行っています。私は明治の雰囲気想像しながら再読を楽しんでいます。それにしても、日露戦争後のわが国を「髭の男」に「亡びるね」と言わせるのは驚きです。虚構中の一人物の発言とは言え、漱石自身大正五年(一九一六年)に亡くなっているのに昭和の実情は知らないのに、まるでその後の命運を見通したかのように世相を冷静に眺めていたように思えます。歴史学者でも、思想史の専門家でもない小説家、詩人は直感、靈感を原動力とする所があると改めて感じる次第です。

話題を変えます。大学の英語の授業はコミュニケーション重視へとシフトしているようです。これもご時勢なのかと思う反面、大丈夫かなと心配もいたします。テキストを介してじっくり読み、考えることの大切さは不変のもので

はないでしょうか。これは文系、理系の区分以前のことでと思います。妄言多謝。(平成一二年ご退職・英文学)

身辺整理と執着心



近藤 喬一

退官して一三年目がなればまできた。退職後の生き方はそれぞれあると思う。私は毎年論文を一篇書こうと決めて出来るだけ実行した。畑地さんが作っていかれた山口大学アジア歴史・文化研究会の雑誌は、手書きの原稿も受け入れてくれたので私の論文も掲載していただいた。

現役の時十分に出る出来なかったことが、何の制約も受けないので関心のあったテーマについて一つまた一つと書き、苦しみもしたが本人には楽しいことであった。しかし陝西省の周原一帯の銅器埋蔵を扱った論文を書きおえた頃から身体調子がおかしくなった。クスリでしのぎながら現在発病以来八年目を経過中だ。難病に指定されていて大変だ。気がついたら家の中を書庫状態にしている。むかし国分直一先生のお宅にはじめてお伺いした時、奥様が本と本のすきまに私は休んでおりますといわれたのを思い出した。我が家では決して許されないあり様だ。が実のところは本の処置の仕方めぐって暗闘があるといった方が正直なところであろう。自己中心のことしか考えられない己のエゴに、愚かさの後悔をする時もある。しかし発病以後に書いた三編は自分でいうのは大変おかしいが、わりと視野の広いよいものができたのではないかと思ったりもする。とりわけ最も新しい今年一月に書き上げたものは、学生時代からの友人で、現在は泉屋博古館の館長さんをしている小南一郎氏からの礼状に、一書にまとめるに値する内容との言葉をいただいたのを切掛に身仕事をすることにした。

本の受け入れ先をさがし、受けとっていただけるか交渉し、運送屋さんを頼んで発送する。本は形があるからまだ始末がよいが、写真や実測図・拓本となると大変だ。時に自分の身体をもぎとり、こわすような思いとか感じをすることもあったが、身動きのままならぬわが身を確認することに、自分の執着心の強さに驚き、あきれながら、一方では出来るだけ急がないと思ふ日々を過ごしている。身辺整理だけに終始すると心が萎える時もあるので、そんな時に他の人の書いた論文を読むと、実によく、よい悪いが理解できるように思える。

私の学生時代の教授の先生は一〇三歳で、当時、助教教授だった方は今年九五歳で亡くなられた。同じ研究室の先輩の方々も半数は世界を異にされている。さらには専門の分野でお世話になった多くの方々をも失い、古人のいわれた多くの言葉が真実であったことがよくわかる。家の中に積み重ねた書物の山を前にして、さてどうするかと不自由な我が身をなでさすりながら、手にとった本の中味がこれまで読んでいないもので、いつのまにか始末をするつもりを忘れていくという好い加減さに呆れながら、捨てていくだけでは人は生きられないのではないかと、ものの形にはならなくても、自分のテーマを持ちつづけるのは、生きていく上で大事なのではないかと、ぶつぶつ嫁さんに同意を求めている。あんたも他に趣味があればよいのやけどなあといわれるが、本を読むかマンガを見る以外に興味らしいものがない私は、自分の身仕事を日々を送っているのが実態である。

P. S 山口大学アジア歴史・文化研究会の雑誌『アジアの歴史と文化』掲載の論文は、山口大学図書館のホームページを開き、YUNO CAで執筆者の姓名(例えば コンドウ タカイチ)と検索していただけるとよいとのことです。

(平成一五年ご退職・考古学)

同窓賛歌

関先生を囲んで

本園 明信

昨年、関先生から頂戴した年賀状に「本年三
月末で大学教員生活五三年を終え、住居も東京
都に移り」と記され、新住所が添えられてい
た。四年前の二〇一一年(平成二十三年)、先生
の喜寿の御祝に出席した時「まだまだ働きます
ので、このようなことをされては困る」と先生
は正直、迷惑そうにおっしゃっていた。下関の
大学で若い学生を相手に楽しく熱心に講義をな
さっている様子であった。ご出身は東京なので
あるが、いつまでも山口で国語学の授業をな
さっている先生のお姿を思い描いていた私に
は、賀詞は全く意外なことであった。東京にお
戻りになったら、そう簡単にはお会いできなく
なると思うと、「先生がこちらにおられる時に
国文の皆さんで集まって一緒に食事でもした
い」と考えた。

「ここがいい」ということで国文同期の渡部
さんを選んでもらったのが、小倉駅からほど近
くにあるニュー田川ホテルであった。かつて讀
賣ジャイアンツが北九州で試合をする時には宿
泊した老舗ホテルなのだそうです。「庭園が
美しく、ホテル内も広くてゆったりとくつろげ
る。しかも、バイキングランチはとてもおいし
い」とのことだった。確かに気がねなく会食が
できそうである。

四月二日小倉駅集合。広島から添田先生に
もお越しいただいた。出席したのは満江さん、
渡部さん、私。満江さんは退職後大手予備校
の顧問として活躍されている。ニュー田川ホテ
ルの庭のきれいなところでホテルの方に撮って
もらったのが掲載している写真である。新緑と
花々、広い池に囲まれ、都会の一角にいること
も忘れてしまえばよかった。先生方との話を楽
しんだ。

私たちの学年にとって、関先生は語学・文学



に関わらず、薫陶を受けた恩師であると言っ
て良い。専門の国語学・国文学を学んだというこ
とにとどまらない。後に石井大、水本精一郎、
そして添田建治郎お三方の先生が新たに赴任さ
れたが、二年生の時には研究室を関先生お一人
で切りもりされていた。先生から直接、言葉遣
い、礼の仕方、態度等を注意されたわけではな
いが、私たちは先生の前では尋常一通りでない
緊張感を味わっていた。一方、先生のお立場か
ら見ると、研究室には二年生から四年生まで
三〇人ほど在籍していたので、教務や労務の事
務的なお仕事の面だけでも大変なご負担をお掛
けしていたらう。そんな時に相談のかたちは
とっていたが、私は国語学の意義について疑問
を投げかけるという趣旨の手紙を差上げたこ
とがある。先生はご多忙の中を、すぐに長い返
事をくださった。「学問は自分一人で行って
るのではない。長い時間をかけて多くの学者が
継承していくことで全体的な成果を見る。自分
はほんの一部の仕事をやっているに過ぎない」
という内容であった。ふだんの先生の外見から
は予測できないようなまっすぐな言葉が書かれ
ていた。私は読みながら、深く心をうたれた。
それからは先生と良くお話をするようになっ
た。今回、送別の会食でも高校時代のお話を
伺うことができた。先生とお話すると、安堵
感というか、しみじみとした気持ちになる。
関一雄先生、添田建治郎先生のますますのご
健康をお祈りするばかりである。

(文理第二三回卒・国語学国文学)

ご縁——大切な出会い——



面田 彩子

大学を卒業して約一〇年が経ちました。卒業
後は、調査会社に就職し、福岡で働いておりま
したが、体調を崩して退職し、久しぶりに実家
のある広島に帰ってきました。先日、大学で開
催されたホームカミングデーに参加し、そこで
このような機会をいただきましたので、私の大
学生生活等について書いてみたいと思います。

山口大学で過ごした四年間は、毎日がとても
充実していて自分以上に大学生活を満喫した人
間はいないのではないかと感じています。勉学
をおろそかにし、遊びに現を抜かしていたとい
う意味ではありません。(笑)。

学生生活を一言で表現するなら「縁」です。
私はこの大学生活で尊敬する恩師、大好きな友
人と出会えました。そしてこのご縁は高校三年
の時から始まりました。

実は、私は高校三年の春まで山口大学は選択
肢には入っていませんでした。ひよんな事から
「山口大学」を勧められて受験したのが山口大
学との出会いでした。

このように山口大学に入った私ですが、在学
中は、人間性や社会性を身につけるといふこと
を意識して行動をしていました。(同級生から
は「嘘やろー」という声が聞こえてきそうです
が…)。在学中は多くのサークルに所属しまし
た。そのサークル活動を通じて、大学内だけで
はなく社会とのつながりを持つことで、自分自
身の視野が広がり、色んなことに関心を持つよ
うになりました。大学で新しい自分に出会
えたと言えるかもしれません。そして所属して
いたフットサルで出会った友人は今でも一緒に
馬鹿話ができる良き友人の一人です。
学部での思い出についてはこの中で書き切

れないほどにありますが、とにかく「良き友人
との出会い」ということに尽きます。二年で
コースに分かれた時、サークル以外の友人で初
めてできた友人とは在学中毎日のように遅くま
で話をしたのを今でも懐かしく思い出します。
また、コース仲間と過ごした時間も大変濃密
でした。社心や政民の研究室など関係なく皆で
ワイワイと飲んでいました。授業が終わるとな
んとなく研究室に集合する、それが私達の習慣
でした。今は人文棟も改修されて綺麗になっ
ていますが、壊れかけのソファで仲間達と語ら
い、ゼミでは壊れかけのPCで作業をしたこと
を今でも覚えていています。

一方、本分である勉学の方では、どうしても
横田ゼミに入りたくて二年時からゼミに参加さ
せていただき、念願がなつて、関心あるテーマ
について学ぶことができましたが、横田先生に
は最後まで大変ご心配をお掛けしました。四年
の六月に公務員試験に落ちて、就活も全敗して
半ば諦めかけていた時も、先生は最後まで応援
してくださいました。卒論の作成のスタートも
遅れてしまいましたが、最後まで全力でサポー
トしてくださいました。(バタバタ作成した卒
論は口頭試問で小谷先生に減点打ちにされまし
た(笑))。先生のお力添えなしには私は無
事に卒業することができなかったかもしれませ
ん。最終的に大学で学んだことを活かし調査会
社に就職し、卒業後も先生には色々とお世話に
なり、体調を崩してこの仕事を退職する際にも
親身になって相談に乗っていただきました。本
当にお世話になりました。先生とのご縁
にも本当に感謝しています。

ある社会学者が「人生は、出会いで決まる」
と言いました。三〇を過ぎても「まだまだ頑張
ろう！」と思えるのはきつとこの時、この縁が
あったからだと思います。これからもこの
つながりを大切にしていきたい。また、このつ
ながりが途切れないように何かできればと思っ
ています。

最後に、同級生のみなさん、時には山口に
帰って、学生時代の思い出に浸ってみてはいか
がでしょうか。きっとわが学び舎はいつでも温

かく迎えてくれることでしょう。

(人文第二六回卒・社会情報論)

山大人文学部という「ホーム」



中山 武

平成二四年度人文学部卒業生、平成二六年度人文学部研究科修士生の中山武と申します。私は人文学部の哲学思想コースに所属し、学部時代は主に宗教学を、院生時代は美学を専攻しておりました。

通常「人文学」部といえは基本的に論文の題材として扱うのは文章であることが多いと思われませんが、私が専攻した分野では映像作品やイベントなど現代社会における様々な文化的事象も題材にして研究することが可能でしたので、多くの学生が主体的にユニークなテーマを設定する自由活発な空気感がありました。時節柄サブカルチャーに関心がある学生が多く在籍していたため、当時の研究室の様子を傍目から見れば趣味で遊んでいるのか研究活動なのか大変判断に困る有様であったかと思われま。

学友たちと朝も夕もなく語り続け、研究室で夜を明かすことも少なくなかったりと、もはや学び舎というより一種の共同生活の場とも化しておりましたが、先生方はそうした傍若無人な私たちを温かく見守ってくださっただけでなく、個々人の興味関心を丁寧に引き出し、學術論文として成立するまで熱心かつ親身に指導してくださいました。私をはじめ、多くの同窓生が楽しみながら勉学においても充実した学生生活を送ることができていたのではないかと思います。

私は今年の四月から地元である島根県の小さな町の職員として勤務しております。今担当している仕事をやる上で、人文学部で学んだ知識

が直接役立っているわけではありませんが、ゼミや研究活動の過程で身に付いた主体性や発想は仕事をやる上でも役立っているように感じます。また、先生方や後輩、イベント取材などで関わらせていただいた地域の方々とも交流が続いており、時折山口を訪ねた際には様々な人たちから幅広い知見を得ることができています。私以外にも同窓生の何人もが度々山口を訪れ集まることがあるなど、卒業後も各々にとつて大切なホームグラウンドとなっているようです。

私たちの世代の学生の多くが、主体性と独創性を重視してくれたゼミで研究に取り組めたことで、他の誰にもない視点と経験を持って社会に飛び立つことができたように思います。こうした成長が可能だったのも、先生方と学生が一緒になって作り出した人文学部のおおらかで温かな空気感があったからこそではないでしょうか。

今後の人文学部の体制や全学的なカリキュラムなどに様々な変化があるかと思われまが、在学生や今後の入学生にも、自主性に満ちた活発な研究活動・大学生生活を送ることができ指導体制が継続されますことを微力ながら応援しております。

(人文第三二回卒・哲学思想 院第二九回修了・地域文化)

《住所変更についての 連絡のお願い》

毎回たくさんの郵便物が返却されてきます。住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局

Fax : 083-928-4527

E-mail:kobun1981@ybb.ne.jp

林雅孝先生の思い出

岩見 國夫

林雅孝先生は、ご子息雅太郎様よりご逝去のお知らせがあり、驚きました。電話でお互いの人事について情報交換したばかりだったので、お元氣だろうと思っていました。

九大、大学院の時、方向を迷っていた時、適切なアドバイスを何度も頂き、自分の進むべき道が明らかになりました。共同執筆で「社会学入門」や「教養としての社会病理学」の本を著す際、数日泊りがけでご指導を頂いたときのご恩は終生忘れることができません。

その際、林先生は、沢山の本を編集・執筆されました。代表的なものは「地方大都市の社会病理―戦後広島市の都市診断」などで調査研究並びに、文部省、科学研究費などの折衝に精力的にかつ献身的にご尽力されました。

林先生の業績は偉大なものであり、今後に生きるものであります。林先生、ありがとうございました。心からのご冥福をお祈りいたします。

☆林 雅孝先生の主な職歴

山口大学教養部・教育学部教授

(文理第一〇回卒・社会学)

鴻文会 会員名簿利用規則

- 一、会員名簿の更新(新規入会、異動に伴う)と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができ。営利を目的とした利用は禁止する。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿(利用者名簿)を作成し事務局で保管する。

原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によつても会誌の編集を進めます。

ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。要領は次のとおりです。

- (一) 本文の書式はタテ一行二一字とし、分量は全七二行以内とする。
- (二) これとは別に、
 - ①タイトル、
 - ②氏名、
 - ③自身の顔写真一枚を文頭に置き、
 - ④文末に文理または人文卒業年次・専攻を必ず()内表記すること。
 ただし①④項合わせて一〇行以内とする。
- (三) 顔写真以外にスナップ写真を掲載したい場合は、一枚限りとして、一枚につき本文の行数を一七行ほど削減すること。
- (四) 掲載は全体で半頁(二段)組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- (五) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- (六) 以上、今号の「同窓賛歌」頁を参照のこと。
- (七) 原稿は返却しません。写真は返却します。
- (八) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- (九) 送稿先は当会事務局内、編集部宛。
- (一〇) 締切りは、毎号とも九月末日とします。

研究室同窓会・同期会だより

山本和之先生叙勲祝賀会

岡村 恵子

平成二六年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章された山本和之先生の叙勲祝賀会を、去る二月二日の夕べ、山口市湯田のセントコア山口にて開催しました。山口大学の英語学・英米文学研究室で先生の薫陶を受けた者が地元山口県内はもとより、遠くは東京や金沢、松江からも集まり、山本先生ご夫妻を含め三五名が賑やかに楽しいひとときを過ごしました。

特筆すべきは、昭和四一年から平成一一年の卒業生まで、期によっては一人、多い期では四六人の、一七期もの異なる世代の教え子が一堂に会したことでしょう。これは山本先生が若き日に我が山口大学に赴任された当初から、退官されるまでの全ての世代に相当します。中学校、高校、大学まで現役、退職後を問わず、主に県内の英語教育に携わっている人たちの世代を超えた交流の場が実現したことは、鴻文会同窓会の歴史の中でも希有なことではないかと思われまふ。山本先生のお人柄を慕って集った人々に出会うことで、自分たちの原点ともいえる英語学・英米文学科の絆を再認識すると共に、誇りを持って日々の英語教育に精進しなければという思いを新たにしました。

限られた時間ではありましたが、新任時代の山本先生に教えを請い、後に同僚として後進の指導に当たられた昭和四一年卒の田中晋さんの挨拶を皮切りに、数名の方にそれぞれの時代の先生との思い出を語っていただきました。若い先生ご夫妻のお宅に押しかけた話、仲人を引き受けてもらった話、先生の語り口そのままの授業でのエピソード、当時講義で使用していた懐かしの「かもめのジョナサン」を手に、孤高のジョナサンの姿に敵しくも温かいまなざしを我々に向けてくださったって先生の真摯な学究人生を重ね合わせる場面等、一瞬にして三〇数年の星霜を超えて思いを共有できました。世代

を超えて教え子たちが「ある、ある」と相槌を打つのは何より愉快な光景でした。

山本先生の奥様によるご挨拶では、皇居での臨場感溢れるエピソードも紹介されました。飾り気のない誠実なお人柄で、もはや同志のごとく先生を支えてこられた奥様、その奥様への感謝の思いが先生のお言葉、振る舞いの端々に感じられ我々も胸を熱くしました。最後は出席者全員でアーチを作りお見送りをしました。ご夫妻のお人柄そのままに、本当に和やかな笑いの絶えない会になりました。

この会を催すにあたり、鴻文会からご協力、ご支援をいただきましたこと、感謝しております。この集いで再認識できた鴻文会の絆が会の更なる発展につながりますようお願いいたします。ありがとうございました。

世話人・原本悦美（平成元年卒）、田中祐子（平成三年卒）、岡村恵子（昭和五四年卒）
（文理第二七回卒・英語学英米文学）



山本和之先生 瑞宝中綬章受章祝賀会 平成27年2月21日 於 セントコア山口

社会学同窓会総会

宮藤 隆夫

平成二七年度・第三八回社会学同窓会総会は、六月の第一土曜日、六日午後四時から例年の会場となっている「防長苑」で開催された。当日は、先生方は木下謙治先生、小谷典子先生、研究室からは高橋征仁先生と速水聖子先生にご出席をいただいた。坪郷英彦先生、横田俊尚先生、岡邊健先生はご都合がつかずご欠席であった。

また、会員の出席者は、昭和二九年卒の松崎、宮川の両大先輩をはじめ、四二年卒二人、四四年卒及び四五年卒が各一人、平成六年卒が三人、七年卒、一三年卒、一四年卒が各一人の計一二人であった。このうち男性は八人、女性も四人。県外からも四人の出席があった。開会に先立ち昨年九月三〇日に逝去された湯川洋司先生のご冥福を祈り全員で黙とうした。

総会では、会長挨拶、先生方を代表し木下先生にご挨拶をいただいた後、会長が平成二六年度収支決算報告、監事が監査報告を行い、質疑の後出席者全員によりこれらが承認された。続いて研究室の近況報告に移り、高橋先生から来月（七月）から新しい先生が着任されること、人文学部の学部改組が行われること、一〇月三日に第三回のホームカミングデーが開催されることなどの報告があった。

総会終了後全員で記念写真を撮り、会場を移して交流会が開催された。交流会は、小谷先生のご挨拶と乾杯のご発声により開宴し、料理とお酒を嗜みながら会員一人ひとりの近況報告に耳を傾け、和やかな雰囲気の中で歓談の時を過ごした。最後に今回福岡県から参加の石本研一（四四年卒）会員の一本締めで交流会はお開きとなった。

私は、会長として毎年卒業式当日に行われる同窓会主催の卒業パーティに出席してきた。今年には三二人の卒業生のうち同窓会へ入会者は一四人であった。私が会長に就任し一〇年にな

るが、同窓会への入会者が半数以下という年は初めてである。

社会学同窓会は、学部同窓会である「鴻文会」より古くもうすぐ発足四〇周年を迎える。この間、研究室の先生方や多くの会員に支えられ毎年欠かさず会報を発行（今年は九三二通を全国の会員へ送付）するとともに六月の第一土曜日に総会を開催してきた。

しかし、近年総会への出席者は少なくなっており、かつメンバーも固定化してきた感がある。また、卒業生の入会金収入を財源として運営されてきた同窓会であり、今年のように同窓会への入会者が半数以下という状況が続けば、これからの同窓会の在り方や存続について何らかの方向性を出さなければならぬ時期が早晩訪れる。会員の皆様の忌憚のないご意見を頂戴したいと思う。

会員の皆様方、一度総会へおいでませ。懐かしい顔に出会えます。
（文理第一五回卒・社会学）



平成二十七年 東洋史懇談会を開く

菊谷 進

去る一〇月二五日(日)八回目となる東洋史懇談会を山口市神田町二・K R R 山口あさくらで行いました。集まった会員は五名でしたが楽しい三時間を過ごしました。

今年から輪番で自前の研究発表を行うことになりました。本年は菊谷進が担当しました。題目は「現代中国経済のありさま」でした。拙い内容ながら、最近の中国経済状況について皆関心が高く熱心に聴き入りました。発表した内容のあらましを掲載してみたいと思います。

去る九月四日からトルコの首都アンカラで主要二〇カ国地域(G20)財務相・中央銀行総裁会議が開かれた。そこで各国に構造改革の実行を求めた共同声明を採択して閉幕しました。名指しは避けつつも世界同時株安の震源地となった中国に改革を促しました。

中国研究家石平氏はその著書『中国の終わりはじまり』の中で述べておられます。中国では二〇一二年をもって高度成長の時代は終わったのです。今まで高度成長を引っぱって来た公共事業の拡大も、輸入の拡大も、外国資本の大量導入もどれも全部頭打ちになったんです、と。

G20は中国を念頭に「必要に応じ新たなリスクに対処する」との共同声明を発表したが、具体的な対策には踏み込まなかった。習



近平指導部は中国経済を投資依存の高度成長から、消費主導の安定成長に構造転換させることを目指しております。樓財務相は今後四、五年の国内総生産(GDP)の実質成長率改革推進で今年度政府目標の七%前後を維持するとも述べています。エコノミストの柯隆氏は次のように述べておられます。

「今の中国経済をとりまく環境から考えると七%の経済成長率というのは決して低いものではなく、手ごろな水準だ。大事なことはこの成長率を維持しながら徐々に構造改革を推し進めていくことでしょうか。構造改革だけでなく政治改革も必要でしょう。政治改革に関しては極めて慎重に事を進める必要があります。」

さて、発表が終ると出席者からそれぞれの意見が出されました。

K氏：中国には古くから「中華思想」というものがあります。これは華夷秩序から流れ中華思想につながったと考えられます。二〇一二年九月に起きた尖閣諸島問題での中国政府の主張は「責任はすべて日本にある」「日本が間違いを改める」というものです。

K氏：習近平政権はたくさん内憂外患を抱えています。どうやって国内の混乱を收拾するかといえば、やはり外部に敵をつくり出して国民の眼を外に向けさせる。そのための恰好の標的が日本になるのです。

W氏：最近の南京事件については犠牲者数などで日中間に見解の違いがある。日本がユネスコに対し登録への懸念を伝えました。それは中国が国連機関のお墨付を得て政治利用をしかねないと考えられるからです。

A氏：これからの中国については中国経済が崩壊して動乱が続く政権の危機が迫ったとき、中国は結局世界協調へと変わらざるを得ないのではないだろうか。そしてそれが突破口になって国内の変化につながるのではないだろうか。話は盡きませんでした。時間のこともあり、来年の開催を約束して解散しました。今回の研究発表はK氏の司馬遷『史記』についてと決まりました。

(文理第六回卒・東洋史学)

研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会に対する助成要綱

(目的)

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会(以下「同窓会等」という。)に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

(助成の対象)

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

(助成の内容)

第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。

2 同一同窓会等に対する助成は、一年度一回限りとする。

3 同一同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

(助成の申請)

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書(別紙様式1)に参加者名簿(別紙様式2)を添えて提出するものとする。

(助成の内定)

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長(以下「会長」という。)はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めるときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

(報告書の提出)

第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書(別紙様式3)を提出するものとする。

(助成の決定等)

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めるときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

(会報原稿の提出)

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」(以下「会報」という。)に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

2 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

(一) 本文の書式は、タテ一行二一字とし、分量は、全五行以内とする。

(二) 本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業年次、卒業年及び専攻を()内で文末に表記する。

(三) 会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。

(四) 会報原稿の締切りは、九月末日とする。

(その他)

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

附則

この要綱は、平成二四年五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。

第三回 山口大学 ホームカミングデー開催

渡邊 早苗

今年、二〇〇周年を迎えることが出来た山口大学。今日に繋がる流れが途絶えそうになった時期を地域の方々からの寄付、支援、政府への折衝をしていただくという支えがあったからこそ。卒業生を母校に招き、教員、在学生と語らいの場を作るだけでなく、地域の皆様もお迎えして感謝の念を表わすホームカミングデーとしたい。

岡学長の挨拶により、平成二十七年一〇月三日、第三回ホームカミングデーは、幕をあげました。

古賀理事・副学長(総務企画担当)による大要説明では、平成二八年度から人文学部が二学科から一学科に、人文科学研究科も二専攻から一専攻に改組されることが報告されました。また、本年度国際総合科学部が新たに設置されたこと、平成二八年度には理学系、工学系、農学系の大学院が改組され、創成科学研究科が設置されること、教職大学院が設置されることも報告され、今、大学が大きな変革の途にあることが感じられました。

人文学部では、一二時から人文学部大講義室で交流会が開催されました。退職された先生方の近況報告にはじまり、昼食をしながらの交流会、午後は研究室での交流会がありました。

大講義室前の中庭で昼食をとりながらの交流会はOB・OGから次々に近況が報告さ



れ、秋の澄んだ空気と木漏れ日の中、和やかな時間となりました。

二時三〇分からは共通教育棟一番教室においてJAXA宇宙科学研究所教授でイプシロンロケットプロジェクトマネージャの森田恭弘氏による特別講演「イプシロンロケットの挑戦」が開催されました。

自らがファンである阪神タイガースの話題を織り交ぜながら、新たなロケット開発を成功させた道のりをわかりやすく説明されました。

夢をもつたら粘り抜き、とことんやりぬくことで道は開けるとの信念をもって開発に邁進されたこと、人生に大切なものは環境とよい仲間であるとのメッセージから、大学が学びの場であるとともに人生の友を得た場所であったと思いきり起こさせる、卒業生が多く集うホームカミングデーにふさわしい講演でした。

来年も、懐かしいキャンパスに多くの鴻文会会員の皆様がお越しになることをお待ちしております。

人文学部広報企画部会ジュマリ・アラム先生が、卒業生の連絡網を作られ、メーリングリストにより卒業生に人文学部の情報やニュース配信をされています。メーリングリストへの登録をご希望の方は、左記のアラム先生のメールアドレス宛てご連絡下さい。

alum@yamaguchi-u.ac.jp (人文第三回卒・西洋史学)



鴻文会「賛助会員」の制度に皆様の ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」(一人一万円)をもとにして行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行、ホームページ管理などの活動を行い、最近では留学生への奨学金支給事業や「同窓会等」の開催に対する助成を開始し、活動も多様化しております。それらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中にあつて、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございました。

活動を支えて下さった方々のお名前を記してお礼に代えさせていただきます。

なお、本年度も、賛助会員制度について、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

同封の振替用紙をお使いいただき、一〇千円のご寄付を、よろしく願います。

平成二六年度賛助会員(順不同 敬称略)

- 藤永公然、宮崎祐子、村田和夫、中野隆司、小野知子、佐々木めぐみ、森江裕孝、柳浦俊静、栗原宏、内田光邦、菊谷進、田中伸、沖中武志、磯部薫、林協三、濱村祐子、濱村浩、岡野幸夫、伊豫英城、渡辺信生、吉村崇、青木寛、坂本貴志、住吉隆義、細山田康弘、芳野奈央、小川朝子、野村悦子、福原綾子、渡邊早苗、土井喜代志、吉田泰淳、中垣八朗、高橋幸輔、内田悟、尾崎徹、岩見謙、北村昇松、白石重昭、橋本学、久枝直、西村敏通、桐原真理、宮原省吾、中島康吉、國弘豊嗣、頼住光子、小西啓子、原口公康、小野美典、濱寄勢津子、国本正則、登城孝胤、島越郎、大谷泰子、小畑元、梶真澄、尾川創二、池佳代、戸成崇和、戸成直美、倉重雅子、田上浩司、野村明夫、戸谷美代子、

編集後記

小池英佐子、木村真弓、永久亨、久米慶典、藤山民子、清水康裕、岡光一浩、田中誠二、加藤久典

山口は花燃ゆ、山大は祝二〇〇周年。だが、人文系にとつては恐怖の「ロクテンハチ通知」。いくらビジネス英語が得意でも、人文知を知らないビジネスパーソンが世界に通用するだろうか。

余り知られていないが、英国人のR・Lステイブンソンが、吉田松陰の伝記を書いています。本年の大河ドラマに関連して思い出しました。「吉田松陰全集」に英文と和訳があります。(内田光邦)

一月下旬の我が家で作品展示会に、久留米市から本園さん(本誌一二頁)ご夫妻がわざわざ訪ねて来て下さいました。四〇年ぶりでした。来年も、楽しい出会いがありますように。(兼清仁志)

今年は大河ドラマの影響もあり、吉田松陰の言葉をよく耳にしました。「学は、人たる所以を学ぶなり。」さて、大学はその役目を充分果たしているのか、勤務している者としてはいささか不安です。(渡邊早苗)

毎年、欠かせない行事のように会報作りに参加させていたがながら、いつの間にか控への存在になっており恐縮しております。諸先輩方のご尽力されるお姿にただただ敬服しております。(和崎睦子)

師走に入った日、蝶を見た。トマトと朝顔の芽が出、コスモスが咲いている。ここ数年「鴻文」にかかわるのが年中行事になっている。発送がすむと一年が終る。今年もまあまあだった。東・西・南・北さ向いて感謝。(大谷泰子)

月・火・木曜日の午後一時から五時まで事務の小野さんが勤務されています。付近にお越しになることがありましたら、是非鴻文会事務所にお立ち寄り下さい。会員の皆様のご健勝と一層のご発展をお祈り申し上げます。(一同)